

ずいそう

## 〈インタビュー〉 はたらくじどうしゃ博物館長



土田 健一郎

聞き手：編集委員 江本 平（範多機械株）

—— 土田さんは、建築業を営むかたわら、はたらくじどうしゃ博物館を設立して、その館長もしておられます。本日は、当協会までお越しいただきました。これからインタビューをさせていただきます。よろしくお願ひします。

まず、建設機械との関わりについてお願ひします。

**土田** 建設機械との関わり合いは、子供の頃高度成長期に中央自動車道が建設された時、多分一番最初はそこから始まったと思うんです。中央自動車道の舗装工事が始まったところは、アメリカのバーバークグリーン社とか外国製のフィニッシャーに当時ボンネットタイプの8トンダンプカーが2台ホッパーへ合材を入れるわけです。その後ろを追い掛けていくようにタイヤローラーが回ったり、鉄輪のローラーが締め固めます。最後に仕上げにタイヤローラーの足跡消しに3軸のローラー、酒井のWH5012とかが走っていました。その3軸のローラーにすごく憧れて、大きくなったらあのローラーの運転手になりたいという気持ちが強かったです。

ずっと建設機械に興味を持ち続けています。小学校のころから膝に乗せてもらってブルドーザーに乗せてもらったりしていくうちに、「オペレーターになりたい」と思うようになりました。カタログも小学校2年生ぐらいのときに「誕生日に何が欲しいか」と言われて、「建設機械のカタログが欲しい」と言いました。近くの土建屋さんからもらった古いカタログの後ろに住所がいっぱい書いてあるわけです。「一番うちから近い営業所に、お母さん、電話してよ。カタログが一式欲しい」と言うんですけど「うちで機械を買わないし、営業マンが来られたらどうするの？駄目だ、そんなことは無理だ」と言われてあきらめていたんです。だけど、あまり僕がしつこく言うものだから、ある日電話してくれたわけです。営業マンが快くカタログを段ボールに一式そろえて、それにポスターや絵本やミニチュアを幾つかくれたわけです。それがうれしくて、それからというものは自分でそこら中のメーカーに電話して「カタログをお願いします」。土建屋さん回りをしたり、重機屋さん回りをしたりしてカタログを集めまし

た。

大人になって、高校は途中で1年も行かないうちに首になってしまい、足場とびへまず就職しました。その会社でたまたま解体工事をやっていたので、「重機に乗れるなら乗ってみろ」という感じで、やってみたら「うまいじゃないか」と言われました。足場を組むときはレッカーに乗れたので、「おう、レッカーに乗れ」と。18歳で車の免許が取れたときに、長野県の辰野町という所にある北尾重機興業という会社の社長に拾われたんです。その人は散々膝に乗せてくれた社長さんで、会社はすごく大きくなっていて、そのときからサラリーマンを10年間やって今に至っています。ずっと建設機械への夢を追いかけて、一つの王道、「建設機械」という言葉から一回も外れたことがないです。明けても暮れてもそれだけです。そのくらい好きで来ちゃいました。

—— 好きな理由は何ですか。

**土田** 多分、小さいころに見たイメージが一番最初に目に焼き付くというけれども、力強い大きな仕事をするといいところが一番魅力的じゃないですか。現在、建設機械の役目は工事現場だけじゃなく、もちろん製鉄所の中ではノロの上をブルドーザーが作業したり、今では水の中で働くブルドーザーや地雷除去の機械もあります。建設機械たちはいろんな仕事をして、世の中で大変役に立っている。

一番声を大にして言いたいのは、「本当は何かしゃべらない建設機械たち、この高度成長を乗り切ってくれた本物のスーパースターはおまえたち、建設機械なんだよ」ということです。

—— 博物館をつくったきっかけは何ですか。

**土田** 本当に思い付きじゃないけど、キャタピラーさんの雑誌に「オペレーターになれた次の夢は何ですか」と聞かれたときに「次の夢は博物館です。もう名前も決めています。その名前ははたらくじどうしゃ博物館です。今建設機械のミニカーをこのくらい持っているんですよ」と。そうしたら全国から「いつできるんだ」と言われてしまったので、困っているうちに時が10年以上たち、ミニカーもどこにも置く所がなくなって

しまいました。

たまたま嫁さんも1人目の子どもができて、実家にいたんですが、「この家は住む所がないよね」と。もうミニチュアの山、山、山、段ボールコレクションで寝る所が精いっぱいなぐらいに家の中がおもちゃだらけになって、なおかつスーパーハウス三つ分ぐらい、違う所に倉庫を借りてミニチュアを置きました。カタログもちろん新型が出るたび集めました。常に古いカタログを探して、全国のどんな土建屋さんのうちでも入っていて、「社長さんの机の引き出しのどこかにカタログが眠っていないですか?」とお願いしました。東京の古紙の市とかにも顔を出しては100年前のカタログを何十万円も払って手に入れたりとかしました。

建設機械のマニアっていっぱいいるんですよ。全国にもものすごいマニアがいます。お医者さんもいれば市役所に勤めている方もいます。建設機械マニアは日本にもものすごくいます。各メーカーさんにもたくさん建設機械を愛する人たちがいます。

今年たまたま「はたらじ」という「はたらくじどうしゃミーティング」を長野県で1回開催して、全国から100人ぐらいのマニアが集まってくれました。前は試しでやったのでゼロ回目にしたんです、今年は1回目として始めるのですが、多分100人以上のマニアが来るでしょう。前はコベルコさん、日立建機さん、キャタピラーさんなどメーカーの方たちも結構手を貸してくれて、ドイツのメーカーではリープヘルさんも協力してくれて、無事ゼロ回目は達成しました。そんな感じで建機が好きで好きでしょうがないんです。

—— 博物館の内容についてお願いします。

**土田** 現在私が持っているミニチュアの台数は2万台超です。世界各国のものがあります。カタログは多分何億部で持っています。

でも、ようやく博物館の名前がメーカーさんたちに浸透してきて、この間も調べてもらえませんかとか、カラーコピーで対応していただけないですかと言うから、それは気持ちよく、「もらったものだし、いまだにもらっているんで、各メーカーさんにはご恩返しだと思ってうちで管理できる間は管理させてもらいたい」ということでやらせてもらっています。

国内外ですから半端な量じゃないです。旧ソ連時代のカタログも手に入れたり。北朝鮮のもあったかな。ルーマニアとか面白い国のも好きで集めています。宮城県石巻市の60代の人から「預かってもらえないか」と言われてカタログを取りに行ってきたんですが、震災で3分の1ぐらいしかまともに残っていませんでした。全部のカタログが生きていたら多分僕のカタログ

のコレクションは、世界5本の指に入っても悪くないぐらいだったでしょうけどね。

でも僕が思うのは、人間だから確かにお金で生活をしていくのは確かだと思いますが、各メーカーは早く日本へ帰ってきて、日本でもう一度メイド・イン・ジャパンで勝負したほうがいいと僕はいつも思います。何の根拠もないですよ。ないですが、日本の建設機械は世界ナンバーワンだし、さっさと引き揚げて日本でいま一度やったら、日本はまた活気が戻るんじゃないかという気がしてならないわけです。

—— 建設機械がお好きだということですが。

**土田** 1970年代というときまだケーブル式のA型のショベル、機械式、それから油圧式ショベルが出始めて、コマツで言うとPC3型が出始めて、コンピューターが載って、アクセルがレバーを離すと回転が下がる。レバーを動かせば回転が上がる。アバンセ5型、6型と行くうちにハイブリッドの時代まで来たわけです。僕は1970年生まれで、ちょうどものすごく幅の広い建設機械の歴史を見られる一番いいときに生まれたんじゃないかと思います。だから僕は今日死んでも明日死んでも悔いはないです。そのくらい建設機械だけは誰にも負けなだけの知識と情報をいろいろ知り尽くしているつもりです。僕はそのくらい好きということですよ。

—— 博物館のほうはどんな状況ですか。どのくらい来られるんですか。

**土田** 今現在は年間1500人ぐらいです、大人、子ども両方合わせて。外国からは一番遠くはオーストラリアから来てます。つい最近では香港。イギリスの方も来たかな。

—— 子どもの評判とかはいかがですか。

**土田** すごい反響です。もう来たら帰らない子ばかりです。

—— 結構喜ばれるわけですか。

**土田** すごいです。ただ見るだけなのに。たまに僕が膝に乗せてあげて一番小さいミニバックホウに乗せてあげるのですが、とても喜んで帰ります。

—— 機械のミニチュアに興味を示しますか?

**土田** ミニチュアにも本物にもすごく……。やはり好きな子たちは、男の子は大体誰もが一度は通る道じゃないですか、働く自動車って。ものすごい人気です。いまだにすごいですよ。オープンの時だけかなと思ったんですが、平日でも何でも予約の電話がすごいです。今は寒いのであまり来ないですが、春先から夏場なんてお昼食べる間もないぐらい来ます。ただ完全予約制でやっているんで、どんな雑誌にも「前もっての予約

をお願いします」と書いています。でもどうしても今日中に見たいとか言う人もいます。

—— これからもまだずっと続いていくという感じですか。

**土田** 続けていきます。生きている限りはカタログ集めとミニチュア収集、それから実車、これは死ぬまでのテーマです。

—— 建機としてはどんなものに興味がおありですか。

**土田** 建機は全部です、すべてです。油圧ショベルから始めてディーゼル機関車まで。要するにディーゼル機関車といっても、鉄道じゃなくて森林鉄道で働くとか、昔は砂防堰堤をつくるために働いた富山の黒部の裏側にいる機関車やケーブル、索道、コンプレッサーまで大好きです。プラントにも興味があります。碎石、アスファルト、プラント、生コンプラント、いろいろ興味があります。

—— 博物館へ来る子供たちへ何かメッセージはありますか。

**土田** 建設機械は大きな仕事もするし、力もすごいし、だけれどもその反面けがもしやすいし、こわいものです。年間、建設機械にいたずらして亡くなってしまうお子さんたちがいます。近年はあまりないですが、何年前の夏休みにホイールローダーが勝手に走って木に挟まって死んだとか、いろいろ話があるわけで、建設機械はこわいものでもあるんだよということをメッセージにしたいと思います。建設機械は人間が立ち向かえないような、火の中、災害の中、地雷とも戦っているという建設機械の偉大さをこれからも子供たちに伝えていきたいです。

地元の小学校、保育園は毎年うちへ来てくれます。ショベルカーのバックホウの爪にジュースを縛り付けて、「1人ずつコップを持って行ってください」と言ってそこへジュースをちょっとずつ注いであげると、子どもたちはそんな些細なことでも喜ぶわけです。その子たちに、日立の双腕重機という両腕が付いたトミカのミニカーとコマツの地雷除去機のミニカーを1個ずつプレゼントするんです。



写真—1 ミニチュア建設機械の展示品（一部）



写真—2 はたらくじどうしゃ博物館と所蔵の建設機械（一部）

—— これからの抱負についてお願いします。

**土田** 僕が膝の上で育ったように膝の上に乗せて体験できるような場所をつくりたいかな。博物館で、実車にももうちょっと身近に触れられるようにしたいです。

—— 本日はお忙しいところありがとうございました。

博物館の所在地：〒396-0025 長野県伊那市上荒井 4648  
予約の連絡先：TEL 0265-78-0141

——つちだ けんいちろう はたらくじどうしゃ博物館長——